

---

# 戦場からの手紙

A Y A K A

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

戦場からの手紙

### 【Nコード】

N0731D

### 【作者名】

AYAKA

### 【あらすじ】

カルフォニア州の小さな街に息子と暮らすミシェルには、戦場についてしまった夫がいた。戦場から届いた手紙は、はたして夫の帰りを待ち続けるミシェルに何をもちたらすのか…？テーマは家族愛です。

(前書き)

この小説はクリスマスギフト企画参加作品です。『ギフト企画』で  
検索すると他の作者さんの小説を読むことができます！

愛する妻と息子へ

元気かい？ こつちはまあ、何とか無事にやっているよ。ミシエル、お腹の赤ちゃんの具合はどうか。順調かい？ 早く君の元へ帰って、僕たちの赤ちゃんを抱きしめたいよ。ケビン、サッカーは上達したかい？ 僕が帰るまでには、ちゃんとレギュラーになっているんだぞ。

それじゃあ、また手紙を書くよ。

アンディ

\*\*\*\*\*

カリフォルニア州の小さな街に住むミシエル・J・ジョンソンは、夫からの手紙を一通り眺めると、夫の手紙専用の木製カゴに入れた。

今日は日曜日。七歳の息子ケビンは、公園でサッカーチームの練習試合があっている。

普段なら応援に出掛けるミシエルだが、今は、もうじき産まれて来るであろうお腹の中の赤ちゃんの為に安静にしている。

少し遅めのランチにしようと、ミシエルはキッチンで沸かしていたコーヒーをカップに注ぎ、戸棚からシリアルを取りだしてソファに腰掛けた。テーブルの上には、栄養満点のシリアルとフルーツ。

いつもと変わらない日々。一見平和そうな暮らしの中でも、常にミシエルの心の内には、表しようのない不安があった。それは、夫アンディのことだ。

アンディはアメリカ軍の兵士だった。そして、今は家族の元を離れ、遠く離れた地ベトナムで戦争をしている。

ミシエルがアンディの無事を確認できる唯一の手紙は、きまって一週間に一通送られてくる。その手紙には、アンディの近況や家族のことが事細かに書き記されており、アンディがいかに家族想いなかがよく分かった。

しばらくの間、コーヒーをすすりながら、ミシエルが庭の芝生に生える植木を眺めていると、ビー……というチャイムが鳴った。息子のケビンだろう。ミシエルはコーヒーカップをテーブルの上に置き、泥だらけのユニフォームを着ているであろう息子を出迎えるためにドアを開けた。

「あらケビン、おかえりなさい」

「ただいまママ」

ケビンはドアが開くなり、いちもくさんに子供部屋に走っていき、汚れたユニフォームを脱ぎ捨てた。ユニフォームの青と赤は、この辺でも言わずと知れたブルーウルフズのチームカラーだ。

「今日の試合はどうだったの？ 相手はジャイアントキングだったんでしょ、強かったんじゃない？」

「うん。6対4で負けちゃった。でも聞いてよママ！ ボクが2点も決めたんだよ！」

「それはよかつたじゃない！ 頑張ったわね、ケビン。ちょうどクッキーが焼けるはずだわ、てを洗ってらっしゃい」

ミシエルは、返事をして洗面所に向かうケビンに微笑みかけながら、焼きあがったクッキーの香ばしい匂いのもとへ歩いていった。

「パパから手紙が届いたわよ」  
「本当?!」

ミシエルがクッキーと一緒に手紙を差しだすと、瞳を大きくさせたケビンが嬉しそうに受け取った。ケビンは手紙を見終わるなり、ミシエルにこんなことを言った。

「ねえママ、パパはいつ帰ってくるのかな?」

無垢な瞳で見つめてくるケビンを抱きしめて、ミシエルは言った。

「ケビンも、パパが兵隊さんだってことは知っているでしょ?」

「うん。遠いところに、悪いやつらをやっつけにいつてるんだよね」

「そうよ」

「でもいつ帰ってくるの? あした?」

「いいえ、明日は無理ね」

「だったらいつなの?」

興味深々に訊ねてくるケビンに、ミシエルは困ったように微笑んだ。

「そうねえ……ケビンがいい子にしていたら、クリスマスまでにはパパも帰って来るかもしれないわよ」

「本当に帰ってくるの?! ボクぜったいにいい子でいるよ!」

パパが帰って来る! と、嬉しそうにはしゃぐケビンを見つめ、ミシエルは複雑な想いで飲みかけのコーヒを口の中に流した。

\*\*\*\*\*

ピッ……ガガッ

『第七歩兵部隊は基地に帰還しろ』

「了解」

無線機の命令に合図を伝え、アンディはほっとため息を吐いた。

「アンディ、気を抜くなよ」

周囲を警戒したまま、アンディの同僚のニコルが言った。アンディも、銃をかまえたまま相槌を返す。

「分かっているさ。家族のもとに無事に帰り着くまでは、嫌でも抜けないさ」

帰還の合図が出て、決して気を抜く事は許されない。ここは、そんな場所だ。敵地ベトナムの北に位置するこの場所で、毎日多くの血が流れている。最前線で戦うアンディ達第七歩兵部隊もまた、常に死と隣り合わせの危険な任務を遂行しているのだ。

ベースキャンプ地に戻ったアンディは、今日も命があることを仲間と喜び合いながら、ミシエルから届いた手紙に目を通した。危険な場所にいるのにもかかわらず、アンディの顔から自然と笑みがこぼれる。

\*\*\*\*\*

親愛なるアンディへ

あなたが無事で本当によかった。そうそう、赤ちゃんの名前だけど、アマンダなんてどうかしら？ きつと、あなたに似てやさしい子になるわ。それから、ケビンがチームのレギュラーになったわ。うふふ、あなたの応援のおかげね。それじゃあ、またあなたからの手紙を心待ちにしてる。愛してるわ、アンディ。

ミシエル

\*\*\*\*\*

アンディは手紙を読み終わると、大切に保管した。愛する妻と息子の近況を知ることができる唯一の手紙。

「アマンダ……いい名前だ。きつとミシエルに似てかわいい女の子になるに違いないな」

そう呟いて嬉しそうに一人にやけるアンディに、同僚のニコルが笑いながら肩をすくめた。

「いっばしの隊長さんも、娘の前では単なる親バカだな」

「ああ早く会いたいよ、愛しい愛しいアマンダに。お前もいい名前だと思わないか？」

「まあな。でも、まだ産まれてもないだろうに」

ミシエルの出産予定日はまだ少し先。気が早いアンディは、それ

でも嬉しそうにもうじき産まれてくるであろう愛娘の話を、延々とニコルに聞かせた。

\*\*\*\*\*

「ケビンいらっしやい！ ほら、雪がつもってるわ」

ミシエルは、大きな声で子供部屋で眠るケビンを呼んだ。窓の外には、真っ白な銀世界が広がっており、路上にはすでに雪だるまを作る子どもたちで賑わっている。

「ほんとだ〜！」

ミシエルの声を聞きつけたケビンは、二階の子供部屋から下りて来るなり、青い上着を羽織って元気よく外に駆けだしていった。

「ケビン！ 朝ごはんは？」

「いらない！ お昼までにはもどってくるよ」

食欲よりも好奇心が優先したのである。走り回るケビンを見送りながら、ミシエルは微笑んだ。

もうじきクリスマス。近所の家々の庭は色鮮やかで綺麗なイルミネーションで飾りつけられている。そしてミシエルの家もまた、同じように、大きな木や家の壁に飾りがつけられていた。

ミシエルが上着を羽織って庭先の赤いポストのもとにいくと、中に新しい手紙が入っていた。アンディからの手紙だ。しかしどうしたのだろうか。アンディからの手紙は、三日前に届いたばかりだった。

ミシエルは心配になって急いでリビングに戻ると、ソファに腰掛け封を開けた。

「ああ、なんてこと……アンディ」

予期せぬ内容に、ミシエルは愕然と目を覆った。身体を温めるためにと沸かしていたコーヒーが、静まり返った室内に、ゴポゴポとやけに大きく音をたてた。

\*\*\*\*\*

ミシエルのもとに手紙が届く数日前、アンディは上官から衝撃的な作戦内容を聞かされていた。

「サーチ アンド デストロイ!? そんな……!」

アンディは上から下された作戦に、抗議の意を示した。

この作戦は、村や森に紛れた北ベトナム兵を探しだし殲滅するという、いわば農村部の無差別攻撃だ。

「上からの命令だ。逆らう事は決して許されん」

上官はそれだけ伝えると、さっさとどこかへ行ってしまった。アンディは行き場のない感情に壁を殴ると、くそっ! と呟き、目を伏せた。

すぐさまテントに戻ると、作戦内容を隊員に伝え、そしてペンを握った。

「とうとうこの作戦が実行されちまうんだな」

ニコルも、今度ばかりはと首を横に振った。

「奥さん宛か？ 何を書く気だ？ まさか、お別れの言葉じゃないだろうな」

「そうかもな。最も危険性の高い作戦だから……今まで包み隠してきたことを全部話す」

「……そうか」

やれやれ、とニコルは気を利かせてか離れていった。

ランプの、ぼんやりとした微かな明かりの中、アンディは紙にペンを奔らせた。

\*\*\*\*\*

愛する妻と息子、そしてもうすぐ産まれて来る愛娘へ

きっとこれが、僕からの最後の手紙になるだろう。すまない、ミシエル。実は君にずっと隠していたことがあるんだ。心してきいてくれ。君には後方援護だと嘘をついていたけど、僕は今、敵地の最前線で戦っているんだ。そして命令が下された。僕はそれに従うしかない。今だから包み隠さずに言う、その作戦で生き残れる可能性は極めて低い。君達を残して逝ってしまうかもしれない僕を許して

くれ……

ミシエル、もう一度君のやさしい笑顔に触れたかったよ。ケビン、お前は男の子だ。いざとなったらママと妹をお前が支えてあげてくれ。最後にアマンダ……一目、お前の姿が見たかった。もし僕が無事に帰ることができたら、その時はおもいつきり抱きしめるよ。

どうか、僕の無事を祈っていてくれ。

アンディ

\*\*\*\*\*

アンディは書き終えた手紙に封をし、胸ポケットに入れて家族の写真を眺めた。

グリーンの芝生の上で、楽しそうに微笑むミシエルとケビン。アンディはそっとキスを落とすと、手紙を握りしめてテントを後にした。

作戦は増援を待ち、明日の夜明けと共に速やかに開始される。それまで、アンディは祈るように夜空に煌く星を見つめていた。

\*\*\*\*\*

ミシエルは無造作に手紙をテーブルの上に散らしたまま、悲しみに泣きじゃくっていた。ミシエルの悲痛な叫びともつかぬ泣き声は、

遊びから帰って来たケビンの耳にも届いた。ケビンは開けかけたドアノブを掴んだまま、不安そうにその場で固まった。

「……ママ？」

ケビンは恐る恐るミシエルの元に歩み寄ると、ミシエルの頬に自分の頬をすり寄せた。

「どっしたの？」

やさしく尋ねてくるケビンを、ミシエルはきつく抱きしめて言った。

「一緒にパパの無事を祈りましょう……ケビン」

「うん」

パパの無事ならいつも祈っているのに。と、アンディは不思議そうにミシエルを見つめた。

そしてふと、テーブルに置かれた手紙に視線を送る。ケビンはそっと手を伸ばし、手紙を見た。

難しい内容は分からないが、ケビンにも、アンディとはもう二度と会えなくなるかもしれないという事は理解できた。

「ママ！」

衝撃的な事実を知ったケビンは、ミシエルの胸の中で、大声を張り上げて泣いた。クリスマスになったら帰って来ると信じていただけに、ケビンは泣き叫び続けた。

やがて夜になったが、ケ빈は泣き疲れてソファァーにうずくまっ  
たまま寝息をたてていた。僅かばかり、瞼が赤く腫れている。

ミシエルは怖くてテレビをつける事さえ出来ずに、祈る気持ちで  
窓の外に見える星を眺めていた。まだアンディはちゃんと生きてい  
るだろうか……。考えれば考えるほど、悪い予感が頭をよぎった。

「お願いだから死なないで」

ミシエルの頬を一筋の涙が流れた。軍人の妻になった時に、覚悟  
は決めていたはずだった。いつかはこんな日が来るかもしれないと  
それでも、いざ直面するとどうしても恐ろしくてたまらない。アン  
ディを失う事が、こんなにも恐いなんで……

ミシエルは祈り続けた。夜明けを告げる朝焼けが空全体を包んで  
も、ミシエルが祈りをやめることはなかった。

\*\*\*\*\*

アンディ達アメリカ軍の作戦進行は既に始まっていた。

アンディの第七歩兵部隊は、森の中を迂回する進路での侵攻を開  
始しており、数日間ひたすら身を隠しながら敵地を進んできた。

もはや気を抜く事など出来ない。張り詰めた緊張に流れる汗の  
量は尋常ではなくなった。

と、その時。アンディの頭上の空を一機のアメリカ軍ヘリコプタ  
ーが飛んでいった。そして、すぐさま激しい銃器音がしたかと思え



に……全てが……まっ……しるに……

……デイ……アンデイ……！

「……………」

気が付くと、アンデイは温かくやさしい光の世界に浮かんでいた。今、微かに誰かが自分の名前を呼んだ気がする。この声は……

「……………ミシエル？」

アンデイがそうささやくと、光の空間にぼんやりとした人影がまるで幻影のように浮かんできた。人影はだんだんと近づいてきて、やがてうっすらとした微笑をたたえてアンデイと重なるように消えていった。

フウツという眠気をさそう心地よい温風にいざなわれ、アンデイは深い眠りへと落ちていった。

\*\*\*\*\*

クリスマスの朝。ミシエルはいつもよりも少し早く目が覚めた。時計はAM6:30を告げており、何か胸騒ぎがする。どうにも嫌な事が起こりそうではない。

そわそわしながらミシエルが窓のカーテンの隙間から庭をのぞくと、一台の黒い軍用車が止まっていた。

その時、来客を告げるチャイムが家中に鳴り、ミシエルの心臓の鼓動がドクン…ドクン…と大きく跳ねた。

ミシエルは慎重にドアノブに手を掛け、そしてゆっくりとドアを開いた。

「ミシエル・J・ジョンソンさんですね。私はアメリカ軍第七歩兵隊のニコル・アリソンです」

ニコルと名乗った正装した男性は、神妙な面持ちで視線を落とすと、こう告げた……

「……残念です。貴女の夫は本当に素晴らしい人でした。最後まで、仲間を守って立派に戦いました」

それはアンディの死を意味する言葉……。アンディは、逝ってしまった……。

ミシエルは玄関に崩れ落ち泣いた。とめどなく流れる涙が、ポタポタと床を濡らした。

受け入れたくない。受け入れられない。こんな現実……

ミシエルの意識は、車の追悼のクラクションと共に遠ざかっていった……

「……っ！……はっ……はあっ……はあっ………夢……」

まだ薄暗い室内の中、ベットから身体中に尋常ではない量の汗をかいたミシエルが起き上がった。ベッタリと頬にはりついた髪の毛

をはがしながら、荒い呼吸を繰り返す。

「……はあっ……はっ……なんて夢を……」

いまだに震える手で時計を掴むと、時計の針はAM5:00を指している。

今の悪夢で完全に意識は覚醒し、もう一度眠ることなどできない。なにより、再びあのような夢をみるかもしれないと思うと恐ろしくて眠れない。

昨日の大雪のせいで冷えきった室内。ミシエルは冷たくなってきた体を温めようと、キッチンでコーヒーを淹れることにした。

コーヒーマシンが沸く間中、心細さを紛らわすために、最近では極力避けしてきたテレビのスイッチを入れた。

この時間なら、なにか早朝放送があっているはずだ。

ミシエルがカチカチとリモコンのチャンネルを切り替えると、案の定早朝のアニメ放送があっていた。

「……トムとジェリーだわ」

かわいいネズミと悪さをたくらむネコのこの番組なら、少しなりともこの嫌な気分は紛れそうだ。

ついでに、ミシエルは沸いたコーヒーマシンを両手で包み込むようにして持ち、背中に黄色い毛布をかぶって丸まった。

どのくらいこうしていただろうか……。ミシエルがふと窓の外に視線を向けると、わずかに朝焼けが差し込んできた。

と、その時。

チャイムが鳴った。

ミシエルの心臓が、ドクン、と大きく脈打った。

もしかして……。そう、胸騒ぎが再び押し寄せてきた。今度ばかりは……。どうしていいかわからない。

「……どちら様……？」

ミシエルは意を決し、慎重にゆっくりと玄関のドアを開いた。  
すると

「ミシエル・J・ジョンソンさん宛てに小包が届いています。サイン、いいですか」

ドアの外に立っていたのは、ニコルでもなくアンディでもなく、  
宅配の男性だった。

ミシエルはほっと胸を撫で下ろすと、慣れた手つきで紙にサイン  
を書いた。

「本当は昨日の昼頃につく予定だったんですけどね。大雪で交通が  
混雑してしまいました」

宅配の男性は一言お詫びを口にして、次の配達へと忙しそうにい  
ってしまった。

ミシエルは、ふと小包の差出人名を確認した。そして、その瞬間  
ミシエルの顔に安堵の笑みがこぼれる。

差出人は            アンディ・L・ジョンソン

いてもたってもいられずに、ミシエルはその場に小包を下ろし、

包装を丁寧に剥がしていった。すると、中には女の赤ちゃん用の毛糸製のニット帽と、男の子用のくつした。そして一通の手紙が入っていた。

\*\*\*\*\*

メリークリスマス！

僕達にとって、今年は最高のクリスマスになるよ。  
もうじき、君のもとへ帰る。

アンディ

\*\*\*\*\*

ミシエルは目を疑った。そして、何度も何度も手紙の内容を読み返す。読み返すうちに、自然と胸いっぱい涙があふれてきた。こんなにも嬉しい知らせに、心から喜びが込み上げてくる。

涙の粒が手紙の文字をぬらした。それと同時に、雪を踏む足音が耳に届く。顔をあげれば……ほら。

「ただいま、ミシエル」

おかえりなさい……アンディ。

それは

クリスマスの朝。ミシェルに届いた家族という名の最高のプレゼント。

END

(後書き)

ご愛読ありがとうございました！

作中のベトナム戦争につきましては、悲惨にも本当にアメリカ軍による農村部無差別攻撃があったようです。また、季節等のズレがあると思いますが…そのところは温かく目をつむってください。皆さんにとっても素敵なクリスマスになることを願っています。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0731d/>

---

戦場からの手紙

2009年3月24日09時01分発行

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。